

脊椎治療の最前線に立つ整形外科医。

QOL改善に尽くす。 臨床・研究の両面から、

ダイバーシティなアメリカで見た難病
いつか自分が治療法を開発し助けたい

多くの人を悩ませる腰痛。高齢化が進む今日、全人口の7～8割が一生のうちに腰痛を体験するだろうと言われ、実際、腰痛を訴えて病院を訪れる患者さんは風邪に次いで多いとされる。「しかし、その原因が特定できるものは2割にも満たない。8割以上の腰痛が原因不明です」。そう語るのは、東海大学整形外科学の酒井大輔准教授である。

専門は脊椎脊髄疾患。背骨が曲がってしまう脊柱変形疾患や椎間板の再生医療について基礎研究から実際の最新手術まで手掛ける。その先進的アプローチは学会でも注目を集め、国内だけでなく、世界的に知られる腰痛治療のスペシャリストだ。

商社マンの父のもと、小学校から中学3年までサンフランシスコとシカゴで過ごした。さまざまな人種、多様な価値観が混ざり合うアメリカで酒井少年は国際感覚を育んだ。

Special
Interview

Sakai, Daisuke

酒井 大輔

東海大学 医学部 外科学系整形外科学 准教授

クラスには脊髄損傷や小児麻痺の子たちがいた。医療先進国のアメリカにも治せない病気があった。ならば、自分が治療法を開発して、彼らを助けよう——。医師をめざす大きなきっかけとなった。

帰国して、国際基督教大学高等学校に進学した。「自由な校風で、いろんな人間がいましたね(笑)。進路もみんなバラバラで、海外の大学に進む人も多く、理系志望は少数派。ましてや医学部をめざすのは学年に1人か2人程度でした」

自由な価値観が飛び交う日々を送りながら、めざした医学部受験。現役合格は成らなかったものの、翌年、東海大学医学部に進学した。

受験生活の間には入院したことも。悪性リンパ腫の疑いがあり手術もした。そのときの執刀医が東海大学の先生だったという。「『東大でなくても、医者になればみんな同じ、関係ないから』と言われて(笑)」。同じ病室に転院してきた中学生の男の子も東海大学医学部付属病院から移ってきたという。

そんな不思議な縁もあってか、医師への道のスタートは東海大学医学部。以来、酒井准教授はおよそ20年、同大学に所属する。

外傷・変性・先天性のすべての要素がある とてもチャレンジしがいのある領域

当時、アメリカ育ちの酒井准教授には憧れのスポーツがあった。アメリカンフットボールである。大学に入って医学部のアメフト部があるのを見つけ、即入部した。

「そんなに強くはなかったですけど、リーグ上位をめざして一生懸命戦っていました。いま思えば、よくあんな激しいスポーツをやっていたなと(笑)」

もちろん医学の勉強にも励んだ。5年次には大学の留学制度を活用し、アメリカのウェイク・フォレスト大学医学部に短期留学した。

興味のあった外科を中心にまわり、日本とアメリカ



大学時代は医学部アメリカンフットボール部の主将としてチーム運営に汗を流した。上段左から2人目。

カとの医療の違いを肌で感じた。

「日本とアメリカの良い面・悪い面を見ることをできました。当時、アメリカでは移植手術が進んでいましたが、倫理観や患者さんの考え方、医療システムが違うだけで、けっして日本の医療技術が劣っていないことが確認できました」

一方で日本の大学教育の課題が垣間見えた。

「向こうの先生は教育の面でもプロ。相手に一番響く教え方で、相手にとっての価値をどう作り出すかを考えアプローチする。異文化国家の良さがありますね」

入学当初から外科医になることを決めていたが、どの診療科に進むかは迷っていた。最終的に整形外科に決めた理由は、生物が生きていくためには運動器が最も重要だと思ったからだ。

「心臓や肝臓だけを診るよりも、運動器を診ることは、赤ちゃんからお年寄りまで幅広い患者さんが対象で、治療内容も外傷から変性、先天性といったすべての要素がある。とてもチャレンジングな領域だと感じました」

脊椎外科を選んだのも、運動器障害の中でも最も患者さんのQOLの低下につながりやすいから。その回復に関わる意味は深いと思った。



研究は臨床に返してこそ価値があるとの信念で積極的に海外と共同研究開発に携わる。
左はスイスで行なわれている大動物試験で、
下は東海大学医学部付属病院での手術中。



ときに人の人生を変えることも その大きなやりがいは研究面でも

現在、年間250件もの手術を手掛ける酒井准教授。腰痛の治療は、生命が助かればいい、ということではなく、結果をシビアに求められる領域だという。「動いていた機能が動かなくなったり、痛みが出たり、しびれが出たり。たとえわずかでも患者さんのストレスが生じてしまうと、満足を得られません」

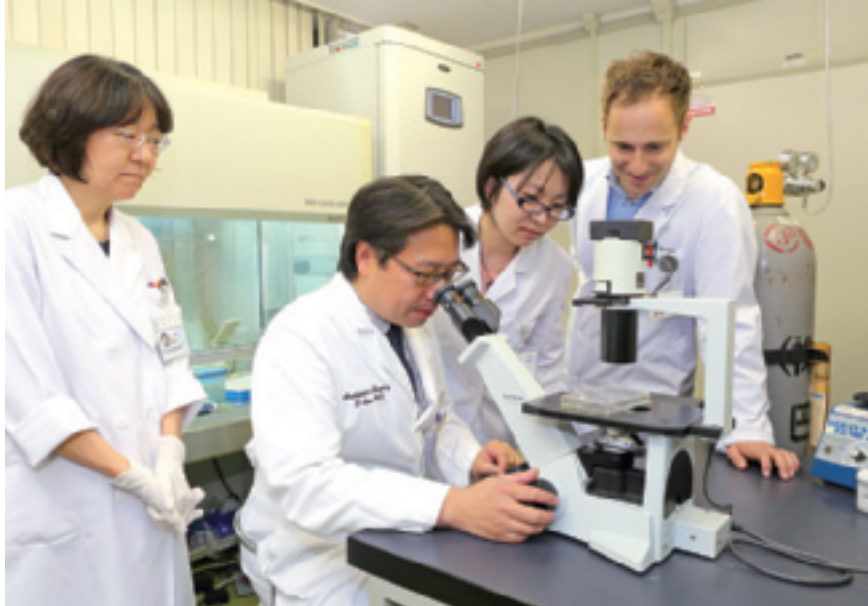
だからこそ、患者さんの要望に真摯に向き合う。中でも印象に残っているのは、ある80歳代女性の患者さん。背骨が曲がってしまっただけで5分も立っていると腰が痛み、QOLは著しく低下していた。さすがに高齢のため、大きな矯正手術は勧められないと伝え、と、「死んでも構わないから手術をしてくれ」と懇願された。家族と相談した結果、手術を行うことに。手術から半年後、その患者さんがオレンジ色のドレスにウィッグを纏って、颯爽と外来に現れた。とても同じ人物とは思えない姿に、あらためて人間が高い自尊心を持って生きることの重要性を実感したという。



特発性側弯症の女子中学生の患者さんのことも忘れられない。思春期に背骨が大きく歪み、曲がってしまうのは身体のみならず、患者さんの精神的な負担も大きい。その彼女は治療をきっかけに看護師をめざすようになり、見事、東海大学の看護学科に合格した。アメフト部でマネージャーを務めていた彼女とは部のOB会でも遭遇した。卒業して看護師になったときは非常に感慨深いものがあった。「ときどき、人の人生を変える仕事だと思えます」

酒井准教授は、臨床の傍ら椎間板の損傷に対する再生医療の研究も進めている。2012年には、椎間板の加齢による変性の一因が幹細胞の消耗であることを発見し、論文が『Nature Communications』に掲載され注目を浴びた。椎間板と腰椎の若さを保つ治療につながるとされ、現在、臨床応用に向け、さらなる解析研究と産業化のための広範囲にわたる業界との仕組みづくりに取り組んでいる。

まだ治療が見つからない病気の治療法を開発し、



多くの患者さんを助けたい——。少年時代、アメリカで描いた夢は、着実に叶いつつある。

学生時代だからこそ、ひとつの分野に偏らず、 広く医療の海を体験してほしい

臨床、研究に加え、教育も酒井准教授に託されたミッションである。近年の学生は優秀で真面目だと評する一方で、「金太郎飴みたいに画一的。もっと個性を際立たせてほしい」と話す。海外の最先端の現場や、幅広くさまざまな医療の世界に触れることは大切だと強調する。

「学生時代は自分がどんな医師になるのか、どんな診療科に進んでどんな疾患を診るのか具体的には描ききれないはず。だからこそ、広い医学の海を知ってほしい。知らないでひとつの領域に進むのと、知った上でそこに進むのは、その後の展開が全然違う。地域医療やへき地医療であっても、最先端を含めた医療の全体を知っていると、やれることが違うはず」

グローバルな観点に立ちつつ、患者さんとのコミュニケーションを重要視でき、さらに最先端の医療がわかる医療人を育成する。それが、酒井准教授がめざす教育だ。

「次に何をやりたいかと問われると、やっぱり医師と答えますね」

夜半まで手術が入ることも多いハードな毎日。それでも患者さんが回復する姿を見ると、「その現場に自分がいられることを、与えられた命として幸せだと思える」と話す。

「多感な受験生時代は、自分は何のために生まれてきたのか、どうしていけばいいのか、ときに見失うことも少なくないかもしれません。その点、医療という世界は非常にやりがいがある分野ですし、自分がこの世に生を受け、自分の存在の意義を見つけるのに、答えを導きやすい道だと思います。ぜひ、皆さんもめざしてほしいですね」

主宰する椎間板変性研究グループにはヨーロッパ、中国から研究者が集まる。様々な価値観がぶつかってこそ現存の障壁を越える道が見えると話す。

医療という世界は、
自分が生を受け、
存在する意義を見つけやすい道。